

プレイ・オブ・コンシャスネス

スワーム・ムクターナンダ

ある所に、ラムジャと呼ばれる金持ちの羊飼いがいた。彼は崇拜のために黄金でできた彼の神、カンドーバの偶像とその神が乗る乗り物を持っていた。その乗り物とは馬であり、この馬の像は神の像より大きかった。偉大な聖人が言うことはまさに真実である。幸運の女神、ラクシュミーは気まぐれで、永続するものは何もない。時は常に変わり、ラムジャの境遇も変わってしまった。昔は富豪だったのに、今は貧しくなってしまった。

これは、このように考えることができる。母親に二人の子どもがいた。一人は富で、もう一人は貧困と呼ばれる。そして、彼らは本当の兄弟なのだ。同じように、快感と苦痛、名誉と不名誉は、兄弟のように一緒に住む。彼らは、互いにとても愛し合っているので、遠くに離れたり、お互いを忘れることは、絶対にない。ある時には兄が我々を歓迎し、また、ある時は弟が歓迎する。兄が歓迎する時には、我々は富と勢力と繁栄を得、一国を成す。すると弟がこう言うのだ。「お兄さん、少しは休んでください。私が代わりましょう」。そして、我々は貧乏になり、物乞いと不運と、悲惨と共に過ごすのだ。

こういうことがラムジャにも起こった。兄貴は休養を取り、弟がラムジャを迎えるようになったのだ。彼はすべてを失い、食べ物や飲み物を買うお金にも事欠く始末であった。人々は彼に言った。「ラムジャ、どうしてそんなに自分を苦しめるのかね。神様にお許しを乞うて、おまえさんのお堂にある黄金の像を売ればいいじゃないか。それでもっと羊を買って、人生をまた出直せばいいじゃないか。金が貯まったら、新しい偶像を買い、それを祭って崇拜し、ブラーミンやサードゥや、貧しい人や盲人や足の不自由な人に大盤振る舞いをするんだ。仕事がうまくいきさえすれば、また善行をすることもできるじゃないか」

人は貧しくなると、弟分のように、考えまで貧しくなるものだ、貧困は物質面だけではなく、思考まで貧しくしてしまう。ラムジャは人々の言うことを聞いて、カンドーバ神と馬の像を布にくるみ、金細工師の店に持って行った。彼は金細工師の店に座った。金細工師は「ああ、ラムジャさん。どうしましたね」と言った。

ラムジャはカンドーバ神と馬の偶像を布から取り出して言った。「これを売りたいんだ。生きるには金がいるんで、売らなくちゃならないんだ。どのくらいの価値があるか教えてくれ」。金細工師はそれをはかりに掛けた。カンドーバ神は 1 キロで、馬は 3 キロだった。その時代、1 キロの黄金は、たったの千ルピーであった。金細工師は言った。「ラムジャさん、神の偶像に千ルピー、馬に3千ルピー差し上げましょう」

ラムジャは、堪忍袋の緒が切れて、怒鳴った。「おまえには脳味噌がないのか。神様が千ルピーで馬が3千ルピーだと！ 何も分かつちやいない」。ラムジャは怒りで真っ赤になった。

金細工師は言った。「ラムジャさん、脳味噌がないのはあんたの方でしょう。あんたには神だの馬だのと見えるでしょうが、私には単なる黄金としか見えませんからね。重みで価値が決まるんでさあ。あんたの神さんは 1 キロだから千ルピー、馬は 3 キロだから3千ルピーの価値でさあ。売りたいきゃ売って、さもなければ帰ってくださいよ」

偉大なシッダ、エクナート・マハーラージは、このような平等なビジョンを持っていた。彼には黄金だけが見えた。彼にしてみれば、この世界は、すべて神のみで満たされていたのだ。彼にとっては、上下、階級、個人、巨大や微小の差は全く存在しなかった。「神自身が宇宙である」と言う見地を持っていたのである。そして、彼はそれを全うし、平等の精神に生きた。

ある日、マハール階級(インドのカースト制に入らない最下層民)の女性が彼に会いに来て、いとおしさを込めてこう言った。「おお、バーバ。神様はあなたの家に水を引いてくれるじゃない

いですか。私には、その神は見えないし、呼び掛けることもできません。おお、エクナート・バーバ、あなたは私の神様です。どうか、私の小屋に来て、堅いパンとチャツネだけでも召し上がってください。私はあなたのお話を聞いたのです。あなたは、偉大な聖人は神のごとくとおっしゃいました。バーバ、どうか私の家で食事をしてください。私はあなたをお招きするために来ました」

このように、彼女はとても謙虚に彼を招待し、エクナート・マハーラージはその招待を受けて、彼女の家に行き、彼女が調理した貧しい料理を食べた。すべての人々が彼を見た。すると、どうだろう、人々はそれについて口々に話し始めた。

「あのエクナートを見てごらん。ヴィシュヌ神を熱心に崇めるブラーミンのくせに、あんな不浄な娘の家で食事をした。何という破廉恥な。彼は汚れてしまった。ブラーミンの誰も、階級のダルマを犯したやつの家の門なんか絶対にくぐらないから」。そう言って、町のブラーミンはこぞって彼を放逐した。

このことは、エクナート・マハーラージには何の影響も与えなかった。彼はそれまでのように幸せで喜びに包まれていた。運も不運も、一貫して歓迎するのが彼の生き方だったため、いささかもうろたえることはなかった。村中が彼に白い目を向け、うわさしたり侮辱したり、彼の行動を非難したりした。しかし、エクナート・マハーラージは、全く苦しまなかった。彼は家庭人であったにもかかわらず、この聖人は完璧な平等感を持っていたのだ。



© 2021 SYDA Foundation®. 著作権所有。